URL：http：//www7.ocn.ne.jp/~wabas/　　E-mail：wabas@eagle.ocn.ne.jp

高齢社会をよくする女性の会会報

No.145　2003年8月発行
高齢社会をよくする女性の会
東京都新宿区新宿2－9－1
第31宮庭マンション802号室
TEL.03－3356－3564
FAX.03－3355－6427
郵便振替　00100-0-79477

―目　次―

高齢社会本番に向けて　樋口恵子 …… 1
高齢社会をよくする女性の会第21回総会報告 … 2
第21回総会記念イベント …… 7
男・老いを語る⑯松本　収……13
沖藤典子の訪中レポート①……14
本の紹介、事務局だより……16

〈第二一回総会を終えて〉

高齢社会本番に向けて

高齢社会をよくする女性の会代表　樋口恵子

いよいよ「高齢者の世紀」として二一世紀が回りはじめました。二〇一五年には、団塊の世代が一人残らず「六五歳以上」人口のグループに入ります。平均寿命は男子七八歳、女子八五歳を超えて文字どおり世界一の長寿国。質量ともに世界一の高齢社会・日本のゆくえを世界が見守っています。介護保険から三年、あと二年で抜本的な手直しの時期を迎えます。当会はじめ介護を担う女性たちの声を受けて、介護の社会化の一つの具現化として介護保険はスタートしました。利用する高齢者自身の立場から、介護保険を、辻つま合わせの制度から人間の顔が見える制度に育てていく時期にあります。

設立以来二一年を経て、今、当会は切実な問題を抱えています。設立当初五〇代六〇代の熱心な会員が、高齢化し、退会なさる方亡くなる方が目立つようになりました。今後は最大の当事者である団塊の世代に重心をうつしながら、一方で、六〇代七〇代以上も、高齢女性当事者としての発言力を強めること、若い世代と高齢女性に会費のヤング割引、シルバー割引を検討し、多様な世代と共に高齢社会の創造につとめるなど、今後基本的な会のあり方について皆様と共に検討してまいりたいと存じます。

高齢社会本番はこれからです。逃げかくれすることはできません。皆様と総力をあげて取り組んでまいります。

全国大会へのお誘い

八月三〇日、三一日の郡山は〝もう秋〟だそうです。多くの会員の皆様とお会いしたいです。

申込み・問合わせ、JTB郡山支店
TEL　〇二四―九三二―〇六五七

高齢社会をよくする女性の会第21回総会

2003年７月５日(土)――――――――――――――於・日本プレスセンターホール

第21回総会が、７月５日午後１時より、日本プレスセンターホールにて開催された。

最初に、司会の稲葉敬子運営委員より「個人会員1,080名、グループ会員100グループのうち、現時点で122名の出席、委任状提出個人474名、グループ31グループで本総会は成立」と報告された。次に林慶子理事が議長に選出され、総会が始まった。

2002（平成14）年度活動報告

〔例会・シンポジウム〕

５月18日(土)　５月例会「ケアマネが語る介護の現場」

６月22日(土)　第20回総会・記念シンポ「介護保険に女性たちは物申す」

７月12日(金)　「マドリード会議のすべてがわかる報告会」（高齢社会ＮＧＯ連携協議会主催、女性と仕事の未来館共催）

８月２日(金)　８月例会・住宅問題勉強会「住宅建築40年、女性住宅建築家の立場から」

８月24日(土)　平成14年度「女性学・ジェンダー研究フォーラム」ワークショップ参加

９月７～８日(土・日)　第21回高齢社会をよくする女性の会全国大会・熊本

９月18日(水)　９月例会・住宅問題勉強会「老いて女のひとり住まい」

10月18日(金)　10月例会・住宅問題勉強会「高齢女性と居住福祉」

11月27日(水)　11月例会「オランダのケア政策について」

12月14日(土)　歳末名物女たちの討ち入りシンポ「女の老後・どこに住む、だれと生きる」

１月20日(月)　新春例会・住宅問題勉強会「老いも本番、住みかはどこに？」

２月19日(水)　２月例会・住宅問題勉強会「高齢者住宅政策の要はこれだ」

〔出　　版〕第20回「高齢社会をよくする女性の会全国大会・富山」大会報告集『いのち輝く、ともに輝く21世紀』Ａ４版、164ページ

〔意　見　書〕介護保険見直しのための意見書（10月18日、代表の審議会に提出）

【調 査 研 究】「高齢女性の住宅の実態と新しい高齢者向き住宅に関する調査」
※平成14年度財団法人倶進会研究助成（1,430票の集計と分析）

【会 報 発 行】８回発行　　〔オープンハウス〕６回開催

【運営委員会】15回開催　　〔理　事　会〕６月10日開催

【会　員　数】個人会員1,128人、グループ会員102グループ、賛助会員８人（2003年３月31日現在）

議長の林慶子さん

◉第一号議案

「二〇〇二年度活動報告」　谷島陽子

今年度は、高齢女性の住宅問題を中心に研究、勉強会を行った。例会は計七回行った。その他、高連協主催・女性と仕事の未来館共催の「マドリード会議のすべてがわかる報告会」、熊本での第二一回全国大会、歳末恒例の「討ち入りシンポ」（第二部・寸劇による行列のできる女の住宅相談所）等を開催した。また、財団法人倶進会の研究助成により高齢女性の住宅問題に関する調査研究を実施した。

谷島陽子さん

2002（平成14）年度・決算報告

収入の部	
科目	決算額
前年度繰越金	19,440,845
会費（含入会金）	7,900,500
イベント収入	1,071,100
印刷物売上	880,169
雑収入 （受取利息） （カンパ、他）	134,670 (10,670) (124,000)
合計	29,427,284

支出の部	
科目	決算額
会報製作費	1,620,603
研究活動費	824,261
会員対策費	172,536
印刷物製作費	734,348
総会費	310,213
人件費	2,185,800
旅費交通費	461,280
送料通信費	1,606,182
水道光熱費	82,350
交際費	28,000
事務費	506,532
消耗品費	225,729
雑費	275,778
イベント費	919,597
予備費	0
次年度繰越金	19,474,075
合計	29,427,284

（単位：円）

貸借対照表 2003（平成15）年3月31日現在

借方（資産）		貸方（負債・基金）	
科目	金額	科目	金額
現金	19,646	前受会費	145,500
預貯金	13,950,682	修繕積立金	4,150,753
定期預金	10,000,000	預り金	200,000
		次年度繰越金	19,474,075
合計	23,970,328	合計	23,970,328

貴島操子さん

◉第二号議案
「二〇〇二年度収支決算報告」

貴島操子

収入の部では、イベント収入以外すべてマイナスとなった。とくに雑収入は不況の影響で大幅減となった。支出の部でも雑費以外軒並みマイナスとなった。雑費に関しては事務局の備品の老朽化などで買い換えるものが増えたことによる。研究活動費が予算より大幅にマイナスになったのは、㈶倶進会からの研究助成金を別会計にしたためである。

2003（平成15）年度活動計画

1．シンポジウム

◎第22回女性による高齢社会シンポジウム　福島大会（於：福島県郡山市）

〈期　日〉８月30日㈯～31日㈰　　〈会　場〉ビッグパレット福島

「今、問い直す21世紀高齢者の医・食・住（充）」

◎歳末名物「女たちの討ち入りシンポ」

〈期　日〉12月13日㈯　　〈会　場〉女性と仕事の未来館

2．会報　　年６回（隔月刊）＋２回臨時増刊号＝８回発行

3．例会他

４月７日　在宅問題勉強会「老後の住まい、本音で語る最新情報」
　　講師：召田長氏（㈳エイジング総合研究センター客員研究員）

４月15日　海外との交流／オランダＮＰＯＥ日本視察団との討論会

５月６日　住宅問題勉強会「老いて女の家探し、高齢女性の賃貸住宅事情」
　　講師：平澤春樹氏（不動産鑑定士）
　　渡辺直紀氏（東洋住宅センター㈱社長）

７月５日　総会記念イベント「統一地方選を戦って」

８月30～31日　第22回全国大会・福島大会

９月25日　高齢者の健康、歯の問題について
　　講師：花井美智子氏（医科医、東京歯科大学非常勤講師）

12月13日　女たちの討ち入りシンポ（於：女性と仕事の未来館）

１月以降　高齢女性の健康づくり、介護保険への新しい提言、他

4．出版　　全国大会（熊本）シンポジウム報告集、他

5．調査・研究　　21世紀社会保障の見直しについての学習、研究

6．オープンハウス　　原則として奇数月の第４月曜日（於：事務局）

7．総会（年１回）、理事会（年１回）、運営委員会（月１回）

8．その他

●監査報告

藤原房子

厳密な監査の結果、正確かつ適正に予算執行が行われていることを報告する。支出においてずらりとマイナスが並んだのは一重に事務局と運営委員の方々が節約に励んだおかげであり、実に効率よく運営されている。しかし、私は当会が現代において大きな役割を担っていること、将来的に課題を抱えていることを考え、「出づるを制するより入るを図る」ようあえて申しあげたい。そのためには、会員増、とくに若い世代の会員を増やしていくことを提案したい。

この後、第一・第二号議案拍手で可決。

藤原房子さん

2003（平成15）年度・予算

収入の部		
科目	予算額	備考
前年度繰越金	19,474,075	
会費(含入会金)	7,500,000	個人会員1,000人、グループ会員100、賛助会員８人
印刷物売上	900,000	印刷物売上、印税収入
雑収入	150,000	寄付金、受取利息ほか
イベント収入	1,000,000	第22回シンポジウム（福島）、歳末東京シンポジウム
合計	29,024,075	

支出の部		
科目	予算額	備考
会報製作費	1,600,000	2,100部（８～16頁）×８回、印刷代、原稿料、編集費
研究活動費	1,400,000	月例会、シニ研勉強会、議員勉強会等
会員対策費	200,000	入会資料、封筒代、オープンハウス、ホームページ作成
印刷物製作費	950,000	第21回シンポジウム集、他
総会費	350,000	
人件費	2,500,000	事務局（専従２人）、ボランティア
旅費交通費	500,000	事務局・運営委員交通費他
送料通信費	1,600,000	会報送料、電話代他
水道光熱費	90,000	
交際費	50,000	慶弔費、管理人さんへ季節の挨拶等
事務費	550,000	事務用品、コピー代、税理士手数料
消耗品費	250,000	コピー機リース代16,275円×12回他
雑費	250,000	管理費18,200円×12ヵ月他
イベント費	1,000,000	第22回シンポジウム（福島）、歳末東京シンポジウム
予備費	17,734,075	
次期繰越金	0	
合計	29,024,075	

（単位：円）

樋口恵子さん

◉第三号議案

「二〇〇三年度活動計画」　樋口恵子

八月の福島県・郡山における全国大会は、地元の二八の女性団体を含む四五団体が精力的に準備中である。是非おいで頂きたい。研究・勉強会は昨年に続き住宅問題を見据えつつ、健康問題も扱っていきたい。

また、藤原監事の弁にもあるように、会員数を増やしていきたい。現在、シルバー割引など『会員倍増計画』を検討中であり、是非全会員の活動目標にしていただきたい。四〇代くらいの地方行政の方や現場で活動している団体の方々に仲間に入って頂きたい。もちろん『当事者』である七〇歳以上の年金暮らしの方々も重要なターゲットである。年金への課税、年金の減額、医療費の増加など、高齢者を取り巻く『包囲網』は非常に厳しくなってきている。女性の視点を通して、全国の高齢者のネットワークと若い世代の連携ができることが当会の目指すべきところだと思っている。皆様からもお知恵を頂きたい。

◉第四号議案

「二〇〇三年度予算案」　望月幸代

大きな特徴として、年々会費収入が減少していることから、繰越金からの持ち出し金によって活動を維持する形になっている。基本的に支出計画は本年度の実績を基に立てられている。

この後、第三、第四号議案拍手で可決。

●役員改選　高見澤たか子

今年は二年に一度の役員改選の年である。現在、理事三四名、監事二名、全員の留任と理事会から、落合恵子さん、俵萠子さん、吉武輝子さんの三名の新任理事の推薦があったが、ご承認いただけるか？（会場、拍手で承認）。吉武さんより「老人力を発揮して、やさしく華やかに、希望をもって頑張っていきたい」とあいさつがあった。

以上をもって、総会は無事終了した。

（久留牧子・記）

●福島大会実行委員一〇名が駆けつけて

地元では、一年間の当会の活動の集大成となり、かつ地域振興に一石を投じる大会となると期待している。郡山は東京から新幹線で一時間一五分の近さである。三千人収容のホールが一杯となるよう皆様のお越しをお待ちしている。磐梯山や会津若松への観光にも期待して頂きたい。

〈第21回総会記念イベント〉

統一地方選を戦って

「立った、負けた、でも元気」――樋口恵子
「立った、勝った、ますます元気」――当選女性議員

第21回総会に引き続いて記念イベントが行われた。松村満美子当会理事の司会のもと、樋口恵子代表の「都知事選を戦って」報告、引き続いて各地で統一地方選を戦われた会員の方々の「地方選を戦って」報告が行われた。

樋口代表からの選挙の報告に先立ち、松村理事より今回の選挙結果について、惜しくも三〇九万票対八二万票という結果となったが、八二万人の方が投票所まで足を運んでくださったことの意味は大きいと、選挙結果についての報告があった。

また樋口代表について、女性と仕事の未来館の館長の仕事、政府の審議会の委員などの要職を辞めた上での挑戦であったこと、樋口代表は選挙戦の進行とともにスリムで、元気になっていったこと、各地で多くの皆様からの厚いご支援を頂いたことなど臨場感あふれるレポートがあった。

「東京都知事選を戦って」

樋口恵子

まず最初に皆様方に御礼を申し上げたい。また私の今回の出馬のことで、人によってはご迷惑をかける結果となったかもしれないという思いがある。

当会は、右から左まで党派によらない中立の立場を保ちながら是々非々で、というスタンスで活動を続けてきた。今回の立候補でも、どこの政党にも所属してはいないし、選挙中も今も全く無所属である。しかし、様々な女性の方々のグループからの要請があって立候補したが、そこに民主党、生活者ネットワーク、社民党の勝手連的な支持を受けたことも事実である。

立候補の動機

今の都知事の政策に全て反対というわけではない。しかし余りにもバランスを欠いた幾つかの問題に、こんな世の中で、都知事の政策に対して、「ノー」と言うグループや、人々の思いを受けて立つ人が一人もいないのでは、東京の民主主義が今問い直されているという思いで、立候補することとした。

私自身は、選挙にはずっと出ないという立場を保持してきた。しかし今回は東京の、日本の民主主義の危機だと思って立候補することにした。そのような意味で、立候補についてどうぞご理解いただきたい。

多くの人々に支えられた選挙戦

今回の選挙戦では、東京の方はもちろんのこと、地方の方々にも非常に支えていただいた。

カンパと言う形でも沢山のご支援をいただいた。街頭での数百円のカンパから、一〇〇万円までさまざまな形でご支援いただいた。中には「これが私の一ヵ月の年金収入です。」といって一ヵ月分の年金に該当する額を送って下さった方もいらした。

我れらかく戦えり

ためらいの気持ちの中ではあったが、物を言うべき時に言わなければということを、言論人の責任として出馬を決めた。

ゲーテの言葉に、「お金を失うことは、ほんのわずかを失うことである、名誉を失うことはある程度を失うことである、しかし勇気を失うことは全てを失うことである。」とある。いい言葉だと思う。

相手が二期目現職という、負けることがわかっている選挙に出る。あまりにも強大になった物に挑むことは正直怖かった。しかし、それ一辺倒でいいのかという思いにかられた。

選挙資金について

私の身の処し方については、幾つかの批判もある。時期的にちょうど東京家政大学を定年退職、退職金が出た時期であった。退職金の提示があっただけで、まだ受け取っていないという微妙な時期であったため、一〇〇〇万円という資金を出しやすかった。

それについて、あなたがお金を出したら、お金がない人は選挙に出られなくなるという批判も寄せられた。

選挙の費用は、各政党から頂いたお金は二五〇万円のみであり、選挙資金の多くは全国の皆様からいただいた約二七〇〇万円のカンパでまかなった。

カンパの他にも多くのボランティアの方々にご協力いただき、選挙事務所は元気が良く、活気があった。毎日、ハガキを書きまくり、電話をかけまくり、ビラを持って駆けまくりであった。

メディアの現状

現職知事の言うこと一色に包まれ、ろくに反論することもないメディアの状況がある。今日のようなマスメディアの時代において、メディアがメディアとしての役割を果たしていない。メディアの役割は、権力に対するチェックであるはずなのに、テレビも新聞も一辺倒になってしまっている。

世間には、現職知事に対する批判を持つ人も多い。しかし、何か発表の機会を持っている人でさえ、批判のための発言を求められる機会はほとんどない。

言うべきことを言うべき時に言わなければ民主主義は終わりである。

「平和ぼけ・ばあさん」の真意

安全保障に関して、先制攻撃などと発言してほしくない。石原さんは、仇討ちというのは立派な志だとも言った。平和というのは、日々の努力により作られるものである。戦争を行わないために大切なことは、「仇討ちをやめること」である。

今回、「軍国おじさん」と「平和ぼけ・

ばあさん」という言葉だけは、メディアでよく取り上げられた。私はその中で「戦争おじさん」とは言わなかった。戦争はまったくよくない。

別の意味で、「平和ぼけ・ばあさん」という言葉は、女の人に受けが悪かった。

石原さんと樋口さんは同じ年なのに、どうして「おじさん」と「ばあさん」なのかという指摘もあった。「平和ぼけ・ばあさん」と書いた真意は、「戦争ぼけよりは平和ぼけの方がよい。安心してぼけられる人生一〇〇年社会に幸あれ。」ということである。

現在、選挙戦記を執筆中

すでに婦人公論から「平和ぼけばあさんの都知事戦」を書いた。現在、八月の福島大会に間に合うように選挙戦記を書いている。

香典はいらないので、どうかその本を買っていただきたい。

平和をめざした活動

異論を言うことが難しくなっている日本の現状の中でも、日本の民主主義は、選挙期間の中では自由に物を言うことが出来る状態であることは確かである。まだまだ世界の中には、選挙の時に暴力に対して体を張って戦わなければいけない国も少なくない。

高齢社会をよくする女性の会は、差別がない、老いが差別されない、老いた女性たちが差別されない、女性たちが貧困の中に追い込まれない世の中を作ることをめざして活動をしてきた。これも平和を目指した活動である。

平和を言うことがこんなに難しく、平和を言うことがこんなに軽蔑され、平和を言うことが卑怯者のように言われるようになった時代はない。

「平和」ということを、はっきり唱えることの自由と勇気から始まると思う。

人生一〇〇年の一人一人を支える社会を

二〇五〇年には、五人に一人以上が六五歳以上の女性になる。

それなのに、石原知事は「生殖能力を過ぎたババアほど世の中に悪しき弊害はない」と他者の言を引用して言った。はっきりと抗議する必要がある。

この選挙は、人生一〇〇年の一人一人を支えていく社会を作っていくこと、それが地方自治ということを提言する機会となった。

立った勝った益々元気

地方戦を勝ち抜いた女たち

榎本桂子（寝屋川市議）

今回の選挙は、初めての立候補であった。告示日の約二ヵ月半前に家族に告げた。選挙カーの運転手とウグイス嬢以外は、全てボランティアの方々に支えられた選挙であった。

独身時代の青年団活動、結婚後の子供会活動などの勉強会で樋口恵子先生の話をお聞きし、大きく影響を受けた。

ボランティア活動を私の活動の中心的テーマとしていきたいと考えている。

選挙戦が終わってから、私はこういう選挙活動をしましたという報告書を作成し駅前で配布した。それを読んだ方から

の反響も寄せられている。

細川邦子（さいたま市議）

四年前はじめて立候補したときは浦和市、その後政令指定都市移行に伴い、今回はさいたま市での選挙戦であった。

子育てする中で、世の中に矛盾を感じることが多かった、自分も世の中の役に立ちたいと考えていた。しかしそれが市会議員という実践の場所に出ていくことには、すぐにはつながらなかった。

組織、お金、ノウハウもない中で、まず勉強しなければということで、市川房枝さんの政治参画センターで勉強した。自分でやってみなければ、人にも勧められないことがわかり、一緒にやっていけそうな人たち一〇人くらいから活動をはじめ、今までいやだと感じてきた選挙はやらないという選挙を行った。何かを変えたいと思っている人たちの選挙であった。

五八人中二位という結果であり、知名度がない中、思いを共有してくださる方がたくさんいるんだということがわかり、それを活動の中に生かしてきた。

二期目は、政令指定都市の中で、行政区ごとの選挙を戦うこととなった。分割された選挙区での選挙は非常に苦しいものであった。その中でも、思いを共有する方々と選挙を戦った。その責任は重いと考えている。

木村民子（文京区議）

樋口さんには、勇気を頂いたと同時に御利益もいただいたと感謝している。樋口さんの文京区での得票は一万四千票であり、「知事は樋口・区議は木村」とアピールしてきた。

一期目に立候補したきっかけとなったのは、一九九四年に樋口さんと行った北京会議での経験である。日本はあまりにも女性議員が少ないことを実感した。

一九九九年の三月に仕事が一段落したこと、それまで市川房枝さんの政治参画センターで勉強もしてきた経緯もあり立候補した。

今回の選挙は、若い人たちに関心を持って欲しいと思い、娘や甥の世代の協力を得て戦った。今回の選挙では、引きこもりの若者たちを街に出てもらうためという目的もあり、ポスター貼りなどを手伝ってもらったりもした。

安久美与子（目黒区）

八年前のこの会で、候補者は壇上に上がれという声に、熱い思いになったことを思い出した。

私はお金をかけないで選挙をやっている。どのようにお金をかけないでやるのかと勉強しに来ている人もいる。

この八年間で五回選挙を戦っている。毎回新鮮な気持ちでのぞんでいる。どの選挙も、全部自分一人で行っている。選挙は経験した者でなければわからない苦しみでもあり楽しみでもある。

松川キヌヨ（新潟県議）

昭和六二年に市議会に出た。市議を三期やって、現在県議二期目である。

女性議員はとかく反権力的であって、かつ教育と福祉しか言わない。最近は教育や福祉については、誰でも言うように

負けた人も勝った人も共に元気いっぱい

なってしまった。ではどうしたらよいか、私は今回土木について発言している。

私は吉武輝子さんとメキシコ婦人会議にご一緒したり、吉武さんの参議院立候補、黒岩秋子さんの立候補時にお手伝いしたりしてきた。

私は、はじめは自民党であった。しかし、今回の長岡市長選で、私の応援した立候補者が当選し、自民党から離党勧告を受け、今無所属である。無所属は本当に幸いである。今、原発の柏崎四号機再開の問題、新潟県での美術館建設について戦っている。無所属であるがゆえに反対することができる。

常光利恵（松任市議）

この春の統一地方選は、都知事選と県議選の応援をした。いずれも敗れたが得難い思いをした。

今回応援した県議選では、いろいろなことを感じた。選挙は集められた人の前で話ができるだけではだめ。

選挙というのは、立ち止まってもくれない、振り向いてもくれない人の背中に向けて何を言っていくかということが大切。

勝った側の陣営から、女だから誰でもいいというわけではないと言われたが、まだまだ数が足りないので、数を増やすことが必要である。

加藤信子（元天理市議）

私は三回選挙に落選したのち市議となり、その後三期務めた。今回も、もちろん立候補するつもりでいた。

一二月に母が体調を崩した後も、何とか選挙は戦いたいと考えていたが、どうにも難しくなり、三月に立候補しないことを決めた。

以下は、お世話になった方々に送った挨拶文（要約）である。

「初当選以来一二年間皆様に支えていただきました。充実した一二年間であり、政治家は私の天職であると思っていました。昨年大阪で一人暮らしをしていた九〇歳の母が体調を崩しました。日がたつにつれて弱っていく母を見、母に十分な世話が出来なかったとすれば、大きな後

悔を残すと考え、皆様のお叱りを受けることを覚悟の上で心を決めました。今は自分の家と母の家を往復する毎日を過ごしております。」

黒岩秩子

堂本暁子さんが千葉県知事になられた後、六ヵ月間参議院議員を務めた経験がある。たまたま今年の二月に新潟から出てきていたため、樋口さんの選挙のお手伝いをすることとなった。

選挙期間中は、日が進むにつれボランティアの方の数が増えていった。皆様のボランティア精神に支えられた選挙であった。

今日は、選挙の時に一緒に戦った皆様ともう一度お会いしたくて、夫と一緒にこの総会に参加した。

吉武輝子

選挙事務所の事務局長は、当会理事の沖藤典子さんであった。素晴しい激走であり、女の力を全開させた事務局長であった。

何故私が勘定奉行を務めたかというと、一九七七年、私は無所属で、市民運動の人にご支援いただき参議院選の全国区を戦った経験がある。その当時の女性の政治参加は、つらいものがあった。

その時に、力をこめて、私の選挙の勘定奉行を務めて下さったのは独身婦人連盟をつくられた山屋光子さんであった。

お金のない無所属の選挙事務所の会計全てを切り盛りし、その後も励まし続けてくれた。その山屋さんの、女が政治参加するためには、女が心から支えなければならないという志を受け継いで今があると考えている。そのような意味で、今回は私自身の志のために引き受けた。

志があってもお金がないと選挙はできない。昔は、誰かが先に飛ぼうとすると、自分が飛べないのに誰かが先に飛ぼうとするのはけしからんという雰囲気があったが、今回の選挙では、自分は飛べないけど、あなたが飛ぶなら手助けするわ、という人々の気持ちがカンパという形で実を結んだ。

樋口さんは、大変見事に戦ってくれました。多くの素敵な女、そしてかなりの数の素敵な男たち、次の世代のために今私たちは「NO」と言わなければならないという志をもった人たちが、一つになって見事な票を獲得した。

同じ志をもった女たちが政治参加していく中で、二度と戦争を起こさない暮らしを実現していく、樋口さんの都知事選はそのことに対する希望を与えてくれた。本当に樋口さん有難う。

最後に樋口代表から、今回の都知事選でお世話になった方々への謝辞、今回、当選された会員の方々の今後のご活躍への期待が述べられた。

そして、これからも一歩一歩、恐れずひるまずに進んでいきましょうと参加者全員にエールが送られた。

（浅川典子・記）

「今、問い直す二一世紀高齢者の医・食・住（充）」

八月三〇、三一日には福島大会で熱い想いを語り合いましょう。

「長寿の理由」

松本　収

1951年北海道十勝生まれ。北海道大学経済学部卒。横路道政誕生のとき公約を担当。以降、横路道政3期12年（1983－95）、知事のスタッフとして活動。1995年リベラルフォーラム（横路孝弘・鳩山由紀夫・海江田万里・仙谷由人らにより結成、後の民主党の母体となる）事務局長。1996年民主党結成、政策調査会事務局長。1999年民主党代表室部長。現在、民主党組織委員会部長／国民運動・団体担当、民主党憲法調査会事務局担当

これは、もう七、八年も前のこと。九州のある県が、八五歳以上の高齢者にアンケートをとった。「長寿の秘訣」を探ろうというものであったが、男と女とでは理由が違った。男の長寿の理由は、きわめて単純なもので、「異性に興味を失わないこと」だ。要するに、男という生き物は「女好き」である間は、まだまだ元気だというわけだ。ところが、女の理由はこれと正反対のものだった。長生きをした女たちに共通しているのは、夫が若死しているか、早々に離婚しているかのいずれかであった。女は男から自由なほど強く生きて行けるのだ。僕は、この興味深い結果を見ながら、おそらく、これは洋の東西を問わず、一致した傾向値ではないかと考えた。「田を耕す力」としての日本の男も、Manで人類の総称の座を占めてきた西洋の男も、存外、「弱い性」ではないかと密かに想ったものである。

それにしても、「女は強い」と実感したのが先の都知事選挙だった。その強さの塊みたいな女が候補者になったのだからたまらない。どこからともなく、ウヨウヨと女たちが現われては「私たちボランティアだ」と自称し、ところかまわず（!?）、ビラをまき、演説をはじめたのである。まさに驚き、いや壮観としか言いようのない光景が演じられたのだ。

活動の中心となった女たちは、旧帝国大学卒業者をはじめ、主婦から一念発起して大学にチャレンジした変わり種（?）もいて、なかなか行動的で知恵の回る連中ばかりであった。そして、僕はこうした女たちこそ、「きっと、長生きするのだろう」と、直感的に想ったものである。と言うのも、冒頭の男と女の「長寿の理由」、あれは一見正反対のように見えるけれど、どちらも、「好奇心」を奮い立たせ、決してくよくよすることなく、自分の人生を軽快に生きようとしてきた人という点で共通するからである。困ったことに（?）、僕が先の知事選で出会った女たちは、この種の人間類型にぴったりと当てはまるのだ。

（次回は渡辺直紀さんです）

その妻の親は、弟一家と暮らしているそうです。

「中国人の考え方としては、息子と住みたいというのがあるんですよ…。だけど、うちの親は、『若い者とは好みも違うし、ここがいいと…』」

両親は京劇が好きで、よく観に行く。高齢者活動センターにも、毎日行く。元気だから、別居していられるけれど、これから先、何かがあった時は、どうしたらいいのだろう…。

「仕事柄、いいホームのあることは知っていますよ。親もホームに行くといいます。しかし、感情として、親の側にいたいんです。ホームには、入れたくないんです」

この先どうしたらいいのか。どんな介護が発生するのか、親への愛情、妻への気兼ね（親の介護で辞める人は少ないとか）、あれこれ考えると、息子としてどうするのが一番いいのか。その内心の懊悩、葛藤が、涙になったようでした。

それにしても、なんと真摯な涙でしょう。日本で、これまで多くの行政マンに取材してきましたが、自らの親のことを語り、涙ぐんだ男性に会ったことはありません。

中国の人は、情けが濃いなあ。親へのこの熱烈愛情を思えば、彼はきっといい福祉政策を、築き上げるのではないでしょうか。

「わたしは、一人っ子政策で子どもは一人です。自分自身は、老人ホームに入って、社会の世話を受けたいと思いますよ」

*

さて氏は、行政マンの顔に戻り、上海市の今後の福祉政策について話してくれました。

上海市では、養老施設整備を都心の発展計画に組み入れており、着実に進められています。新しく団地を作る時は、必ず養老施設を併設するそうです。

「昔は、老人ホームに親を入れると親不幸といわれたものですが、今は、親が行きたがっています」

氏は2つの理由をあげました。1つは、『生活の保障』、もう1つは『社交の場』。

今後は、「どんな高齢者にどんな介護をすべきか」評価期間の設置など、財源も含めた政策を検討中とのことです。在宅介護のあり方も検討されています。

ご両親様への深い愛情が、上海市の高齢者政策に反映されますよう、願わずにはおられません。

上海市の福祉対策と行政マンの涙

上海市民政局社会福祉部副部長　REN CHI YUE氏

上海民政局で、副部長のREN氏から、上海市の全体的な高齢化の現状を伺いました。

中国全体に高齢化の波は押し寄せていますが、上海では、全国平均よりも20年早く高齢化が進んでいます。65歳以上人口192.5万人（高齢化比率14.5%）、80歳以上も32.9万人います。50年代と比較すると、40倍に増えました。今、100歳以上の人も、170人くらいいます。

高齢化の特徴はつぎのように要約されます。

① 高齢化の比率が高い

② スピードが速い。

70年代には60歳以上人口は10.2%だったが、90年代には18%になった。現在の平均寿命は、男77歳、女79歳。（日本では1985年で、女性の平均寿命80.5歳）

③ 高齢化のスピードは今後も上昇する。

④ 介護を必要とする高齢者が多い。

調査によれば、生活が自立できない人、半分くらいの自立の人、合わせて高齢者の12%。

⑤ 一般家庭の少人数化が、どんどん進んでいる。1世帯平均2.7人。中国は三世代、四世代の同居の伝統があったけれど、今は変わった。四世代同居が新聞記事になるほどである。

*

一般に老人介護が発生した場合、子どもの住宅の近くに引っ越してもらい、そこへ世話に通うことが多いようです。

「社会学者は、スープのさめない距離が一番いい、というんですがね」

氏は話を切って、突然涙ぐみました。

「じつは、わたしにも80歳の父と、80歳の母がいるんです」

氏は5人きょうだい。1953年の生まれ。両親は近くに住んでいて、まだ元気。自分で食事支度もでき、自立度は高いようです。時々は肉料理などを、妻が作って持っていってくれます（実の息子は作らないのか？）。

向って右から2人目がＲＥＮ氏

本の紹介

「いま会いたい　いま話をしたい」

福島端穂著

（明石書店刊　一八〇〇円＋税）

国会の難局を元気いっぱいで乗り切ろうとしている福島端穂さんの対談集である。二五人の対談相手のうち女性が九人しかいないのはアレ？と思うが、戦争・平和・国際人権から死刑廃止・子どもや女性への暴力そして教育・広告・美術まで幅広い問題について語り合う。

今どきこんなに熱く語れる人もいるんだなあと紙面から立ち上ってくる情熱に圧倒される。加藤周一さんや太田昌秀さんの怒りを底に沈めた発言や若桑みどりさんのジェンダー差別への直裁的な怒りに共感を覚えエネルギーが湧いてくる。まさに「暗い時代を楽しく生きるための元気の出る」一冊である。

昨年亡くなった松井やよりさんを「行動する巨人」と福島さんは評しているが、いま日本が進みつつある世の中の方向を少しでも変えて行くには一人一人が「行動する人」にならなければと思う。

福島さんがいろいろな人との出会いを楽しんでいるツーショットの写真もいい。

（GAL　満田康子）

「『ときめき世代』の生きがい探し」

高見澤たか子著

（集英社刊　一六〇〇＋税）

「ときめき世代」という本のタイトルを思いついたきっかけは、私の周囲の五十代後半から七十代の人たちの、その表情の輝きでした。年老いた親たちの介護、子どもの進学や就職、結婚をめぐる問題などを抱えながらも、何か自分が夢中になれるものを持っている人たちのなんと若々しいこと―定年直前に妻を亡くし、どうすることかとみんなの同情を集めていた男性は、いまや大学の古文書調査メンバーに変身。地域の生涯学習講座で古文読解を学んだのがきっかけとか。六十歳でバレエの舞台に立つのは、娘のバレエ教室に付き添っていた母親のほうです。それぞれ心ときめかしている人たちを見るにつけ、私たちはいまや年齢不問のエイジレスの時代を生きているのだと実感します。この本は、年齢にとらわれず、自分のための人生を生きようとしている人たちへの応援歌です。「もっと生きやすくなるために」、「知恵のある暮らし方」、「からだの声をきく」、「食べることは生きること」など実生活のヒントも豊富。

ありがとうございました。

会員の飯泉康江様（品川区）から多額のご寄付をいただきました。活動資金として有効に使わせていただきます。

事務局だより

福島大会（郡山市）へのお申し込み等はお済みですか。現地の実行委員会はじめ関係者の皆様は、大歓迎の態勢を整えてくれています。まだの方はぜひご一緒に！　郡山でお会いいたしましょう。

☆この大会に間に合うようにと二冊の本が刊行される予定です。

(1)昨年の熊本大会『シンポ報告集』（本会発行）記録報告書形式で、一冊千円。(2)代表の都知事選総集編ともいうべき『チャレンジ』（グラフ社発行）は選挙のノウハウから裏話まで、感動と苦悩満載。一冊千三百円（消費税込）これらの売上純益金は本会の活動資金となります。

☆九月の活動はチラシのとおり二回です。よろしかったら両方一緒にお申し込みを。

☆次のオープンハウスは九月二二日（月）十一時から四時迄です。

（新井倭久子）